

短期大学における初年次教育の取り組み — 国語表現指導の提案 —

A New First-Year Experience Program for Junior College Students — Teaching Suggestions for Japanese Expression —

平 田 祐 子
Yuko Hirata

(要 約)

大学全入時代を迎えた教育現場では多方面から初年次教育の取り組みが提案されている。本稿では、短期大学におけるリメディアル教育と初年次教育の目的と内容を考案し、高校生から短期大学生への移行をさせる一年次教育を基礎ゼミナールで行うことの意義を説明の上、日本語の言語・非言語表現スキル修得の過程と結果に関する教育内容を言及する。

(キーワード)

初年次教育、国語表現、コミュニケーションスキル

はじめに

平成17年1月に中央教育審議会大学分科会で高等教育の将来像に関する答申があり、その翌年からは日本の将来を危惧して学士課程教育の構築に重点を置いた審議が繰り返されてきた。その結果、平成20年3月に「学士課程教育の構築に向けて」という審議のまとめが発表された。学士課程教育に関しては大学の学部段階の教育と定義づけているが、短期大学課程に関しては「ユニバーサル段階の身近な高等教育の一つとして、また、地域と連携協力して多様な学習機会を提供する地域基盤社会での土台づくりの場」¹と将来像に関する答申に留まり短期大学固有の提言は行なわれていない。しかしながら、短期大学課程に関しても学士課程教育の構築に向けての審議のまとめを活用して個々の主体的な取り組みを推奨している。

さて、教育現場では18歳人口の減少や社会現象の変化によりユニバーサル・アクセスされ大学全入時代を迎えることになったが、これはまさに1980年代のアメリカと類似した形相をなしている。アメリカでは1970年代からFD活動も盛んになり、学生数が減少して学生の質的低下や多様性、高等教育の大衆化に伴い70年代後半からFirst-Year Seminarが導入されるようになった。全入時代を迎えようとしている現代日本の大学の状況や学生の質が80年代のアメリカに類同しており、日本でも2001年の時点で85%を超える学部において初年次教育（リメディアル教育も含む）が何らかの形で行なわれていた。²

本稿では、昨年（2008.3）発足された初年次学会において具体化されつつある初年次教育内容を受けて、短期大学課程で求められている初年次教育を考案する。拙稿³でも述べたように受講者である学生は、社会動向の変化により興味や関心が多様化して、学習意欲や理解度の低下と格差の拡大などにより大学生像が変容している。そのため、単一的な授業展開では学生の満足を得ることが難しくなっている。現状の学生に対応した教育をもたらすための教授方法の開発に伴い、本ゼミナールで3年間継続し

て行なってきた国語力やコミュニケーション能力を向上させる取り組みと結果を紹介し、今後、短期大学が学生の自己啓発や自己表現力向上の教育をどのように方向付けていくかについて言及する。

1. 初年次教育の捉え方

(1) 短期大学における初年次教育の目的

初年次教育は、First-Year Seminar（導入教育）やFirst-Year Experience（初年次体験）として20世紀の初頭にアメリカではじまり1970年代に盛んになった。日本でも、山田（2008）が2001年に初めて全国の大学を対象に初年次教育の位置づけや普及性に関する調査を行ない、当時、636学部を越える学部（全体の85%）において初年次教育（リメディアル教育も含む）が何らかの形で行なわれていることが明らかになった。2008年に初年次教育学会が発足するまで、日本の高等教育機関においては混沌としたなか手探りで初年次教育に似た教育を遂行していたようである。

FD・GPフォーラムのなかで中村（2007）は日本における初年次教育の目的について次のように述べている。

目的を一言でいうと「入学学生が生徒から学生になること」といえよう。いわゆる学生として入学を許可された若者が単なる「所属としての学生」から実質的な「学習者としての学生」になっていくまでのプロセスをアレンジするものということができる。このプロセスでつまずくと、2年生以降の学習がスムーズに進まない結果になる。⁴

高校生から大学生になるための移行をスムーズに導くものが初年次教育の第一の目的と考えられる。全入時代以前の大学は大学側が厳しい選抜試験を設けて選ぶという選択権を持っていたが、大学全入時代となった現在では、高偏差値の学生が入学してくる研究型大学⁵ 以外は、学生に入学の選択権が委ねられている状態になっている。そのため、大学としての特色を出し、高大連携をして初年次教育やリメディアル教育に力を注ぎ、2年生以降の学習の動機付けや学習意欲の喚起が必要となってくる。

ここで、初年次教育とリメディアル教育の相違点を明らかにしておきたい。初年次教育は「高校生から大学生への移行を助けるものであった」のに対して、リメディアル教育に関して藤田（2006）は次のように述べている。

リメディアル教育（補習教育）は、本来は大学入学前に習得しているはずの高校課程の学習内容を、入学後に補修することを指す。 [中略] ただし、実際の教育内容にまで立ち上がった場合、両者の間に明確な線を引くのが難しいことも多々ある。⁶

リメディアル教育は「高校で習得している学習内容の補習教育」であるが、両者は混同して用いられている傾向にあり、いずれにしても現在の学生には初年次教育もリメディアル教育も不可欠となるものである。特に、短期大学生の場合は2年間という短期間で卒業して社会人となるわけなので、補習教育であるリメディアル教育と初年次教育が同時期に並行して導入されるようなカリキュラムを作らなければならない。

短期大学における初年次教育の取り組み

(2) 初年次教育の内容

初年次教育の理想とすべき内容に関して、中央教育審議会の「審議のまとめ」では、「(大学における学習スキルも含めた)学問的・知的能力の発達、人間関係の確立と維持、アイデンティティの発達」⁷としている。杉谷(2004)が学部長を対象に調査した結果から表1の授業内容について読み取ることができる。人文系・社会系では「レポート・論文の書き方などの文章作法」の占める割合が最も多く、次いで「プレゼンテーションやディスカッションなど口頭発表の技法」「読解・文献講読の方法」となる。「コンピューターを用いた情報処理や通信の基礎技術」「図書館の利用・文献検索の方法」「学問や大学教育全般に対する動機づけ」なども授業内容として高い数値を得ている。

表1 学部系統別の授業内容(複数回答)

	授 業 内 容										(回答科目数)
	ア、レポート・論文の書き方などの文章作法	イ、図書館の利用・文献探索の方法	ウ、コンピュータを用いた情報処理や通信の基礎技術	エ、プレゼンテーションやディスカッションなど口頭発表の技法	オ、読解・文献講読の方法	カ、フィールドワークや調査・実験の方法	キ、高校で学習する教科の補習教育	ク、学問や大学教育全般に対する動機づけ	ケ、学生生活における時間管理や学習習慣の組織化	コ、将来の職業生活や進路選択に対する動機づけ・方向づけ	
人文系	50.8%	36.7%	41.8%	37.3%	36.7%	10.2%	6.2%	37.3%	6.2%	9.6%	100%(117)
社会系	49.0%	36.4%	39.0%	44.3%	40.2%	10.3%	8.5%	47.2%	13.5%	17.6%	100%(341)
理系	18.4%	12.7%	25.4%	11.4%	7.7%	6.0%	42.5%	33.1%	7.0%	18.7%	100%(299)
その他(学際等)	38.7%	31.6%	37.8%	32.0%	24.0%	13.8%	18.2%	42.7%	10.7%	15.1%	100%(225)
合計	38.3%	28.6%	35.3%	31.0%	26.8%	9.8%	20.0%	40.5%	9.8%	16.0%	100%(1042)

※回答科目数に占める各内容の割合

出所：杉谷(2004)「大学管理職からみた初年次教育への期待と評価」⁸

また、中村(2007)は初年次教育の内容として、初年次カリキュラムの必要性を第一に考えるべきとして、基礎ゼミナールとコミュニケーションツールの習得を軸にすべきと述べ、対人コミュニケーション能力のツールを日本語、情報機器操作、外国語の三つの視点から捉えている。①日本語での言語表現、②情報機器の操作によるもの、③外国語による言語表現として、コミュニケーションツールの情報機器操作と外国語習得は各教科の科目内での学習としているが、言語によるコミュニケーションは基礎ゼミナールでの指導を位置づけている。

初年時教育では「コミュニケーション力」の形成を重視するという点について解説をくわえよう。それは、①言語によるコミュニケーション、②情報ツールの習得、③外国語、の3つからなる。①を主として担当するのが基礎ゼミ、②と③は、別途、担当教科が設けられる。②と③は、コミュニケーションツールの習得と言い換えてもいい。英語は、コミュニケーションツールの一つとしてとらえている。⁹

短期大学の場合は2年間という短期間なので、前項にてリメディアル教育と初年次教育の両方が必要と述べたが、高大連携が実現している今、それらが出口であるキャリア教育にも繋がることを理想と考える。高校・短大・社会が連携をなして、将来の日本を担う社会人一年生を育成するのである。表2は、経済産業省の社会人基礎力に関する研究会で考え出された能力要素である。物事を主体的に取り組み他人に働きかけ実行する力、物事を客観的に分析して新しいものを生み出すために計画的に準備して新しい価値を生み出す力、自分の意見を的確に伝えて意見や立場の違う人も尊重して目標に向けて協力し合うことが社会人として必要なこととされている。短期大学課程で求められるリメディアル教育・初年次教育とキャリア教育が連動性をもたせる教育内容を本学における基礎ゼミナールで実現できないかを模索し続けていたが、キャリア教育のなかでも社会人基礎力の能力要素が身につくような教育内容の導入が肝要であり、次章では学生の動機付けや学習意欲の喚起について基礎ゼミナールでの指導過程を考察する。

表2 社会人基礎力の能力要素

		
		
		
		
		..	
		
		..	
		

出所：経済産業省「社会人基礎力に関する研究会」（平成18年2月8日）¹⁰

2. 国語表現・コミュニケーション力を向上させるための取り組み

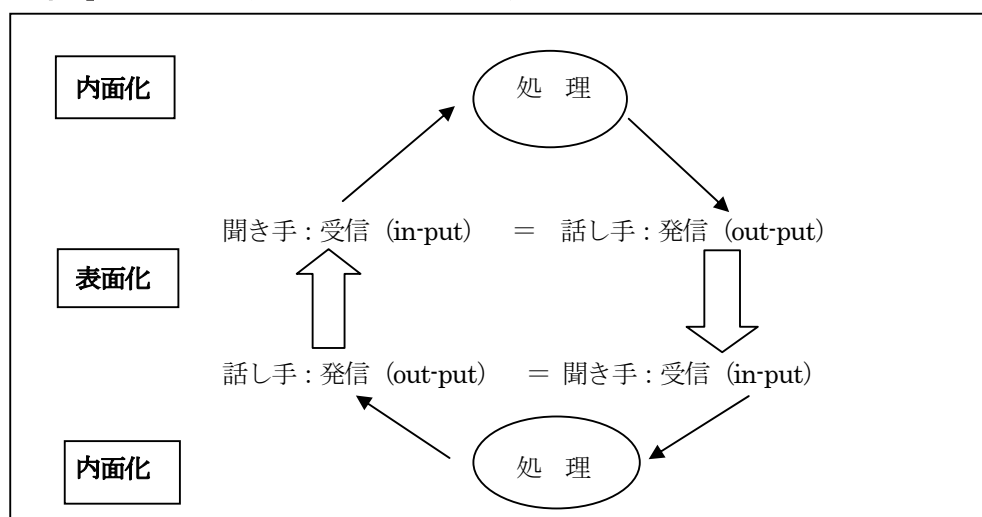
(1) 実施の背景

本ゼミナールはコミュニケーション能力を高めることを目的としているため、「読む・書く・話す」というリメディアル教育とともに初年次教育で必要となる言語によるコミュニケーション能力を高める教育も行なっている。受信（in-put）の際には「傾聴」「観察」「情報収集」のスキル、処理の際には「熟考」「関連」「優先づけ」のスキル、発信（out-put）の際には「反射・言い換え」「共感」「質問」「確認」のスキルを習得することにより日常生活において円滑な1対1のコミュニケーションができるものとする。「1対1」のコミュニケーションの「言語表現＝言語によるもの」の仕組みに関しては、拙稿（2007）の図1にて詳述したが、話し手が発信（out-put）して聞き手が受信（in-put）する。この発

短期大学における初年次教育の取り組み

信と受信を合わせた過程をコミュニケーションといい、このコミュニケーション方法が人間の場合は非常に高度で複雑であるため人間社会において難解なものに見なされ、図1のように複雑な送受信のなかにコミュニケーションサイクルが存在する。受信 (in-put) →処理→発信 (out-put) を分かりやすく分析したものがコミュニケーションサイクルのスキル内容になり、表面的な作業と内面的な処理を瞬時に行わなければならない。処理に必要な事項を内面化して位置づけ、個人が習得すべきスキルと捉えている。受信 (in-put) の際には「傾聴」「観察」「情報収集」のスキル、処理の際には「熟考」「関連」「優先づけ」のスキル、発信 (out-put) の際には「反射・言い換え」「共感」「質問」「確認」のスキルを身につけることによりコミュニケーションサイクルが円滑になり対人コミュニケーション能力を高めることになるのである。

図1 「1対1」のコミュニケーション形式のサイクル



出所：平田(2007)「ビジネスコミュニケーション能力向上のための手法—トライアングルメソッドの理論と実践—」¹¹

さて、本ゼミナールでは、上記の教育技法のひとつとして街頭アンケート調査を位置付けている。3年前の実施当初は、第一義的発話行為¹²に着目し、コミュニケーションにおけるローコンテキストを踏まえたスキルを習得するための取り組みとして拙稿(2008)にて詳述したが、3年間継続するなかで、先述したように初年次教育の一環として捉え、学生の「読む・書く・話す」能力とゼミ生同士が協力し合い、お互いに「やる気」を喚起し、楽しく前向きに取り組む姿勢を養うことを目的としたものへと指導内容を推移させた。全く見知らぬ他者へのコミュニケーションをゼミ生(1・2年生)全員が取り組み、学内での場面設定では難しくなるため学外での課外学習とした。見知らぬ他者への発話場面を想定したものには数種類あるが、仮に道順や場所を尋ねるのでは結果として残るものや自らのスキルをフィードバックするものが少ないため、街頭アンケート調査を行なうこととしたのである。

(2) 街頭アンケート調査で習得できる能力

リメディアル教育に関しては基礎ゼミナールの前半、及び、前期の科目「国語表現」や「言葉とコミュニケーション」の中で行なう。初年次教育で必要とされている言語によるコミュニケーション能力を高め

る教育とキャリア教育のなかでも社会人基礎力の能力要素が身につく教育のプロセスについて詳述する。

まず、街頭アンケート調査を行なう場合、下記の表3の①から⑩のプロセスを踏む必要があり、各事項で習得できる能力要素と分類を書き込んだ。3年前の拙稿（2008）では第一義的発話行為に着目してコミュニケーションにおけるローコンテクストを踏まえたスキルを修得に焦点を当てて実施したため、②～⑤の事項を筆者が担当した。しかし、2年目以降は②～⑤をゼミ生が分担して責任を持ちながら体験していくことに重要性を見出し、街頭アンケート調査のオリエンテーション時に役割分担を行い、経過を報告しながら出来上がったものは全員でチェックすることにした。

表3 街頭アンケートの習得能力

街頭アンケート実施 のプロセス	コミュニケーション能力要素	社会人基礎力の能力要素	社会人基礎力の分類
① アンケート項目に関する話し合い	話す力	主体性、働きかけ力、実行力、計画力、創造性、発信力、傾聴力、柔軟性、	前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力
② アンケート用紙作成	書く力	主体性、実行力、計画力、発信力	前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力
③ 依頼文作成	書く力	主体性、規律性、発信力、働きかけ力	前に踏み出す力、チームで働く力
④ 駅長室への依頼	話す力	規律性、発信力、働きかけ力	前に踏み出す力、チームで働く力
⑤ 道路使用に関する依頼	話す力	規律性、発信力、働きかけ力	前に踏み出す力、チームで働く力
⑥ 依頼表現の練習 (言語・非言語表現)	話す力	主体性、発信力、柔軟性	前に踏み出す力、チームで働く力
⑦ 実践（記入者への依頼・御礼）	話す力	働きかけ力、発信力、状況把握力、規律性、	前に踏み出す力、チームで働く力
⑧ アンケート集計	書く力	実行力、規律性	前に踏み出す力、チームで働く力
⑨ 発表	書く力、話す力	主体性、発信力	前に踏み出す力、チームで働く力
⑩ フィードバック	書く力、話す力	課題発見力、計画力、状況把握力	考え抜く力、チームで働く力

出所：筆者作成

「前に踏み出す力（アクション）」は、街頭アンケート調査実施までのプロセス①から⑨で必要となる能力で、「考え抜く力（シンキング）」は、①・②・⑩のプロセスで習得できる。①ではアンケート項目について話し合い、2年生は卒業研究レポートに役立つアンケート項目を、1年生はコミュニケーションに関するアンケート項目をそれぞれ考えてマッチングさせる。②では考案して作成する。終了後、⑩では全ての振り返りを行なう。2年目以降は前年度の先輩達の反省文を読み返し、本年度実施のための課題を発見する。「チームで働く力（チームワーク）」は、プロセス①から⑩の全ての事項で必要となる能力である。これらは、経済産業省が社会人基礎力に関する研究会で考え出した能力要素と一致しているため、基礎ゼミナールにおいて、リメディアル教育と初年次教育、キャリア教育の社会人基礎力に関する教育が可能となるものとする。

3. 街頭アンケート調査結果

(1) 調査の概要

具体的な実施状況は下記のようなになる。調査の目標と参加学生の理解に関する事項は3年間共通している。実施場所も3年間同一場所としているが、調査に参加した学生は毎年、半数が入れ替っている。

- 【 共通目標 】 コミュニケーションスキル向上
- 【 共通理解 】 ・調査可能箇所は公共の場のみ（駅側との取り決めを守ること）
・一人当たり最低10部はとること

1年目

- 【 日 時 】 平成19年7月20日（金）午後3時～5時30分
- 【 場 所 】 三重県津市の津駅東口周辺
- 【 参加学生 】 ゼミ生（17名）＝全員が「国語表現」「言葉とコミュニケーション」受講済み
日本人女子学生（16名）、留学生男子学生（1名）

2年目

- 【 日 時 】 平成20年8月1日（金）午後4時～6時
- 【 場 所 】 三重県津市の津駅東口周辺
- 【 参加学生 】 ゼミ生（20名）＝全員が「国語表現」「言葉とコミュニケーション」受講済み
日本人女子学生（20名）

3年目

- 【 日 時 】 平成21年8月5日（水）午後3時30分～5時30分
- 【 場 所 】 三重県津市の津駅東口周辺
- 【 参加学生 】 ゼミ生（21名）＝全員が「国語表現」「言葉とコミュニケーション」受講済み
日本人女子学生（21名）

(2) 集計結果

参加学生自らのコミュニケーション能力を高めることを目的とした調査ではあるが、街頭アンケート調査をすることにより日本人が考えているコミュニケーション能力とは何なのかを明確にして、今後の対人コミュニケーションに活かしていくことを学生自身が再確認することも必要になってくる。学生は集計結果を出した後、最終的に街頭アンケートの担当部署の反省や当日の反省、そしてプラスになったことや意義（今後活かさせていけるもの）を話し合った後、集計内容を示し、日本人のコミュニケーションについて話し合う。

設問項目1. と3. は、3年間共通質問項目とした。設問1. では「日本人がコミュニケーション能力についてどのように考えているか」を質問して、設問3. では「自分自身の身だしなみについて気にしている度合い」を聞いた。これらは、学生自身が自らの手で調べることにより、社会人になった時の

対人コミュニケーションに役立つものと考え作成したものである。設問1.の具体的なアンケート内容は表4であり、該当するもの全てに印をつけてもらうように依頼した。結果は表5と表6になる。日本人が考えるコミュニケーション能力とは、「聞き上手なこと」の数値が最も高く、次いで「挨拶ができること」であった。「笑顔で接すること」「思いやりがあること」「話が上手なこと」「他人に気遣いができること」も14歳から82歳までの日本人がコミュニケーションに必要なことと考えていることであった。

表4 アンケート項目 1.

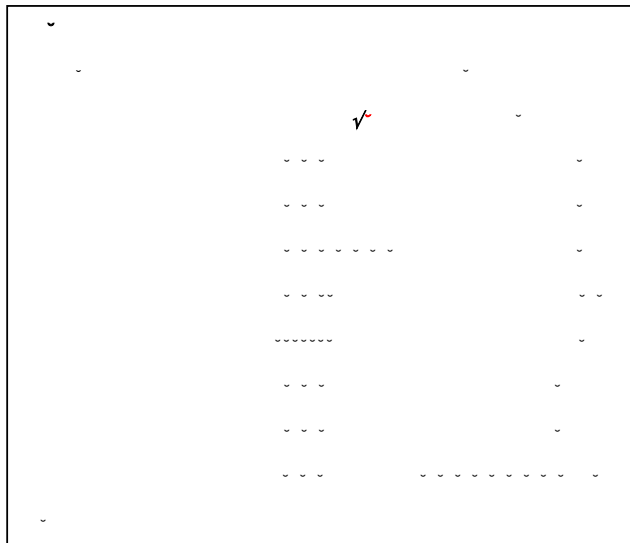
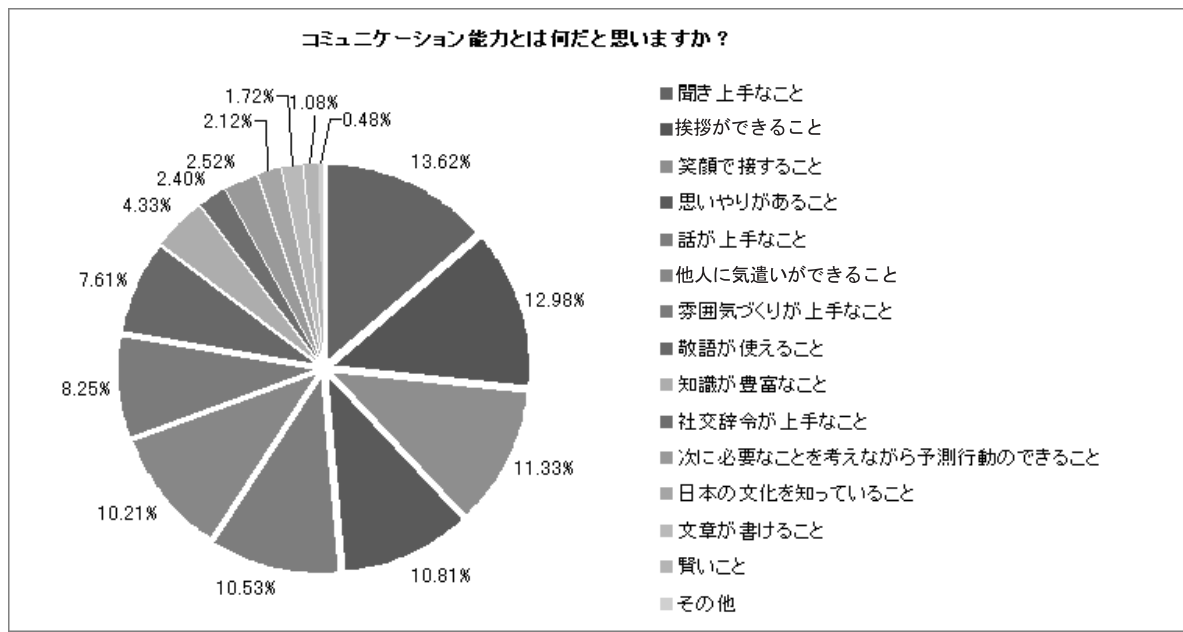


表5 項目1.「コミュニケーション能力について」

	&#
	&%
	%&
	%#
	%&
	% (
	%#)
	\$ #
	\$#)
)#
)&
	(&
	'&
	%
	\$%

表6 項目1.「コミュニケーション能力について」

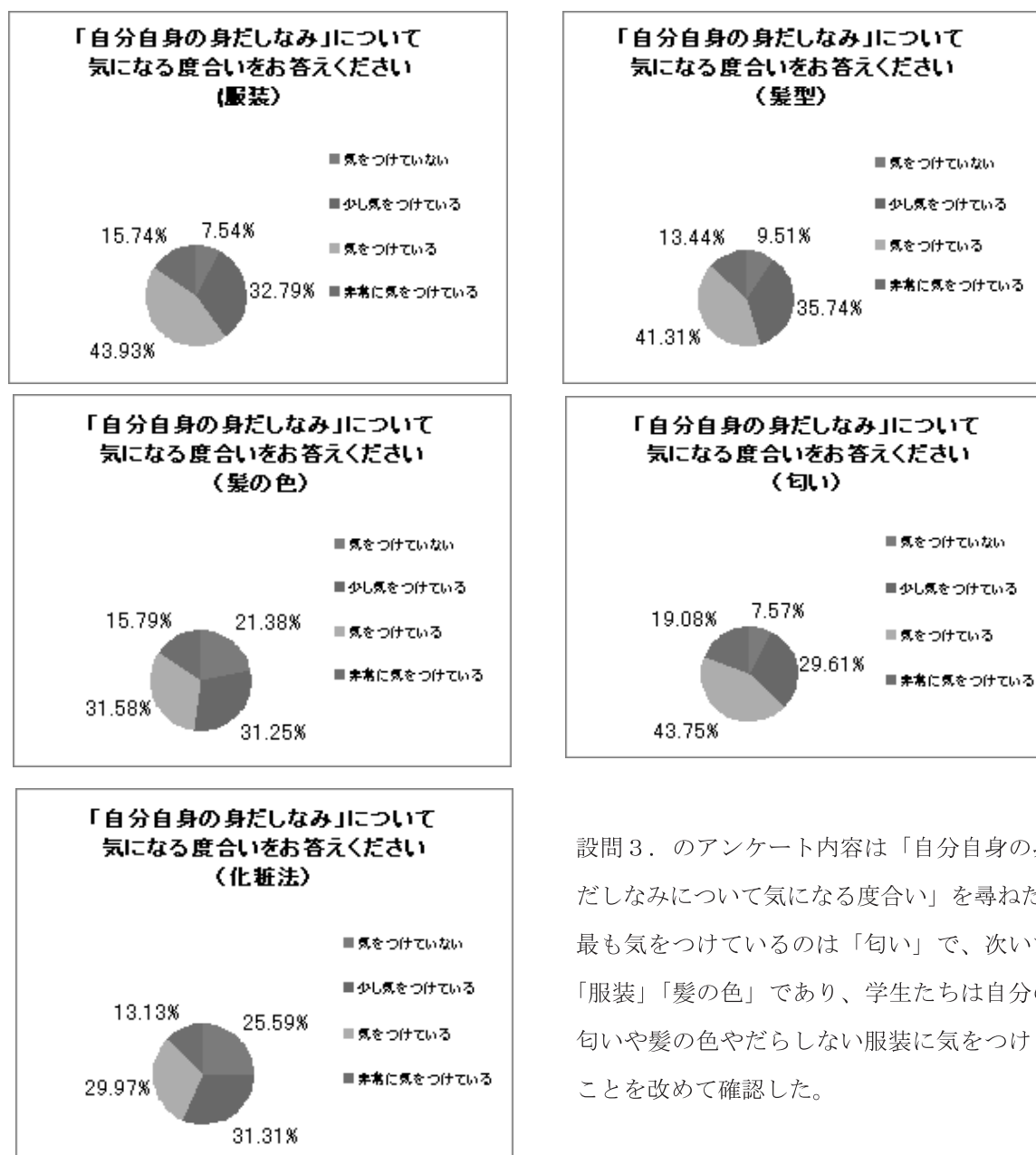


短期大学における初年次教育の取り組み

表7 項目3.「自分自身の身だしなみについて気になる度合い」

	3-①服装	3-②髪型	3-③髪の色	3-④匂い	3-⑤化粧法
気をつけていない	23	29	65	23	76
少し気をつけている	100	109	95	90	93
気をつけている	134	126	96	133	89
非常に気をつけている	48	41	48	58	39

表8 項目3.「自分自身の身だしなみについて気になる度合い」



設問3. のアンケート内容は「自分自身の身だしなみについて気になる度合い」を尋ねた。最も気をつけているのは「匂い」で、次いで「服装」「髪の色」であり、学生たちは自分の匂いや髪の色やだらしのない服装に気をつけることを改めて確認した。

おわりに

中央教育審議会大学分科会が平成20年3月に「学士課程教育の構築に向けて」という審議のまとめを発表したが、「学士課程教育」に関して大学の学部段階の教育と定義づけており、短期大学課程に関しては学士課程教育の構築に向けての審議のまとめを活用して個々の主体的な取り組みに委ね具体的な内容にまで踏み込んでいない。本稿では、昨年、発足した初年次学会において具体化されつつある初年次教育内容を受けて、短期大学という機関で求められている初年次教育について考察してきた。

現代の学生には初年次教育も Remedial 教育も不可欠となるものである。特に、短期大学生の場合は2年間という短期間で卒業して社会人となるわけなので、補習教育である Remedial 教育と初年次教育が同時期に並行して導入されるようなカリキュラムを作らなければならない。高大連携が実現している今、それらが出口であるキャリア教育にも繋がることを理想と考えている。主体的に働きかけ自ら行動する前に踏み出す力、物事を客観的に分析して新しいものを生み出すために計画的に実行する力、自分の意見を的確に伝えて意見や立場の違う人も尊重して目標に向けて協力し合うことが社会人として必要なことなのである。学生に対応した教育をもたらすための教授方法の開発に伴い、本ゼミナールで3年間継続して行なってきた国語力やコミュニケーション能力を向上させる取り組みと結果を紹介したが、経済産業省が社会人基礎力に関する研究会で考え出した能力要素と一致しているため、基礎ゼミナールにおいて、Remedial 教育・初年次教育・キャリア教育（の社会人基礎力に関する教育）が可能となるものとする。

今後も継続して、短期大学生の自己啓発や自己表現向上のための教育をどのように方向付けていくかについて考案する所存である。

註

- 1 中央教育審議会大学分科会（2008）「学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）」
中央教育審議会大学分科会 制度・教育部会 pp.2
- 2 山田礼子（2008）「初年次教育の歴史と理論」文部省大学局学生課『大学と学生』54 pp.17
「日本においても初年次教育学会が立ち上がり、その設立大会が2008年3月11日に同志社大学において開催され、330人もの大学人や関係者が参加した。」
- 3 平田祐子（2009）「授業内容を充実させるための国語能力に関する一考察」
『高田短期大学紀要』27 pp.97-98
- 4 中村博幸（2007）「ゼミを中心としたカリキュラムの連続性」嘉悦大学 講演集 pp.6
- 5 前掲書pp.4の図表—1「大学・学生類型と初年次教育の各要素の内容」からも明らかになるように、A類型の大学に入学する学生は高校・大学の学習も十分でありエリート型の思考を所有。自学自習が身についているため初年次カリキュラムの目的が変わってくる。本稿ではC類型の基礎ゼミナールを中心としたカリキュラムを参考にする。

短期大学における初年次教育の取り組み

図表-1 大学・学生類型と初年次教育の各要素の内容

(◎目標的・ *具体的)

	オリエンテーション	基礎ゼミナールを中心としたカリキュラム	カリキュラム外学生サポート	
大 学 ・ 学 生 類 型	A 類 型	◎発展的学習の場の提供 *本学カリキュラムの系統性的説明 *専攻する学問体系へのガイド *学ぶ学問を展開するためにどうするか (学会・研究会・勉強会の存在)	◎知的好奇心の涵養 (オリジナリティの追求) *クリティカルシンキングを鍛える *多様なレトリックを理解する *アイデアの拡散 創造的アイデアとは *アイデアの収束 概念→具体へ *コミュニケーション・スキル ・他人や意見の異なる人とのコラボレーションできる ・グループダイナミクス、リーダーシップ的要素	◎必要な学生のためのサポート *学問的アドバイス *自主ゼミのすすめ *研究室活動への勧誘
	B 類 型	◎本学の教育方針の理解 *大学のシステムの理解 履修登録の理解 カリキュラムを理解して、自分で履修計画が 立てられる 図書館ツアー *各種サポートの紹介 奨学金・学生相談室・キャリアアップの手立て	◎導入教育 *サーチスキルの基礎 ・レポートの書き方…目的別 ・討論の種類と方法などを理解し、身につける ・資料の必要性と収集 *アイデアの拡散 BSなどのテクニックの習得 *アイデアの収束 KJなどのテクニックの習得 *情報スキル ・ネットワークの活用 ・統計手法などが使える *コミュニケーション・スキル ・外国語を使ってコミュニケーションがとれる ・グループ活動の実際をテクニク的に習得する	◎学習支援 *学力不足の学生に基礎学力を付けるためのサポート 体制への誘導 *学生相互の交流のサポート 交流したくてもできない学生への仕掛け (コンパ、催し物) *“引きこもり”からのサポート 学生が選んだタイプの合った教員との面談 学生相談室との連携 *よろず相談 (高校の担任、クラブ顧問的)
	C 類 型	◎学習の動機づけ *就学不安の解消 *教職員とのふれあい *リメディアル教育への誘導 *きめ細かい学習ステップの提示 *生活習慣向上の必要性	◎教員との対話 *授業を通して学生と親しくなる ◎学習習慣の必要 *授業に出席する習慣をつける ◎学習意欲の喚起 *ラーニング・スキル ・ノートテイクの方法 ・テスト勉強の方法 *大学の授業の聞き方 *身近な成果を与える	◎就学支援 *習慣的不登校をなくす こまめな声かけ *履修計画を教員とともに作成する ◎逸脱からのサポート *定期的面談 個別に面談し、学生の状況を把握する *生活習慣に対するアドバイスを行う *教員との対話 大学側も“人”の集まりであることへの理解

6 藤田哲也 (2006) 「初年次教育の目的と実際」リメディアル教育研究1-1 (第一回大会特集) pp.1

7 中央教育審議大学分科会 (2008) 「学士課程教育の構築に向けて (審議のまとめ)」

中央教育審議大学分科会 制度・教育部会 pp.59

8 杉谷祐美子 (2004) 「大学管理職からみた初年次教育への期待と評価」大学教育学会誌 26 pp.34

9 中村博幸 (2007) 「ゼミを中心としたカリキュラムの連続性」嘉悦大学 講演集 pp.7

10 経済産業省「社会人基礎力に関する研究会」(平成18年2月8日)

11 平田祐子(2007) 「ビジネスコミュニケーション能力向上のための手法

—トライアングルメソッドの理論と実践—」日本ビジネス実務学会『ビジネス実務論集』25 pp.51

12 平田祐子 (2008) 「発話行為が他者へもたらす影響に関する研究」『高田短期大学紀要』26 pp.154

Vanderveken, D. (1998) が、語用論において日常会話での話し手の意味は文章で書き表した時の意味と同等でないことを示している。例えば、“Can you pass the salt?”と尋ねることで話し手が間接的に塩を回してくれるように聞き手に頼むことは、その発話の第一義的発話行為は間接的な要請であり、聞き手の能力についての字義通りの質問ではないとしている。

参考文献

有本章 (2005) 「大学教授職とFD: アメリカと日本」東信堂

石堂常世 (2008) 「大学における初年次・導入教育に関する研究」

『早稲田教育評論』22-1 早稲田大学教育総合研究室 pp.83-103

大島弥生 (2007) 「大学初年次のレポート作成授業におけるライティングのプロセス」

高田短期大学紀要第28号

- 『言語文化と日本語教育』33 お茶の水女子大学日本語文化学会編 pp.57-64
- 太田和敬 (2007) 「大学の授業改善に関する試論」『人間科学研究』29文教大学人間科学紀要委員会pp.28-32
- 海口浩芳 (2007) 「効果的な授業運営に求められる教育方法等の検討」
- 北陸学院短期大学紀要39 北陸学院短期大学 pp.23-33
- 木野茂 (2005) 『大学授業改善の手引き：双方向授業への誘い』ナカニシヤ出版
- 木原俊行 (1995) 「教師の反省的成長に関する研究の動向と課題—他者との「対話」システムに注目して」
教育方法学研究21、pp.107-113
- 佐藤学 (1996) 『教育方法学』岩波書店
- 杉谷祐美子 (2004) 「大学管理職からみた初年次教育への期待と評価」大学教育学会誌 26 pp.29-36
- 関正夫 (1988) 『日本の大学教育改革——歴史・現状・展望——』玉川大学出版部
- 田中ゆき子 (2000) 「日本の短期大学におけるコミュニケーション教育の実態調査」
Speech Communication Education Vol.13 日本コミュニケーション学会 pp.33-48
- 中央教育審議大学分科会 (2008) 「学士課程教育の構築に向けて (審議のまとめ)」
中央教育審議大学分科会 制度・教育部会 pp.1-63
- 中村博幸 (2007) 「ゼミを中心としたカリキュラムの連続性」嘉悦大学 講演集 pp.1-13
- 根本泰雄 (2004) 「大学入学者の現状と初年時教育」大阪市立大学『大学教育』1-1 pp.35-45
- 野村眞木夫 (2000) 『日本語のテキスト——関係・効果・様相——』ひつじ書房
- 宮崎勝弘・赤堀方哉 (2009) 「『ディベート』を用いた初年次教育の可能性」
梅光学院大学『梅光学院大学論集』42 pp.7-17
- 山田礼子 (2008) 「初年次教育の歴史と理論」文部省大学局学生課『大学と学生』54 pp.16-23